

P03 特集

「風の吹くまち」

P10 Field Review

- 近藤工業株式会社
- 財団法人日本自動車研究所 FC・EV センター

P14 azbil mind

- 高性能気体流量計 MRA2000

P16 azbil のある街

- 食の豊かな日本海の拠点【新潟】



News Head Line

もっと詳しく! → <http://jp.yamatake.com/news/index.html>

平成19年3月期 決算公開

5月10日に平成19年3月期の決算を公開しました。
当連結会計年度は、市場環境の好調さに加え前連結会計年度末から連結の範囲に加えた株式会社金門製作所の業績が寄与し、売上高は2,345億7千2百万円と前連結会計年度に比べて24.6%の増加となりました。損益面は、経費削減やコストダウン等に努め、営業利益は173億1千3百万円（同28.1%増）、経営利益は178億5千7百万円（同28.1%増）となり、当期純利益は106億4千6百万円（同8.7%増）と増加しました。

→ A

問い合わせ先

A

株式会社 山武
広報グループ
TEL 03-6810-1006
FAX 03-5220-7274

特集 風の吹くまち

山、川、海と地形の変化に富む日本では、季節に応じてさまざまな風が吹く。
肌を刺す北風や、冬眠を揺り起こす春一番、夏の嵐など、
風は新しい季節の始まりを告げる。

そして人々は、目には見えなくても確かに存在する風と親しみ、
風を肌で感じながら暮らしてきた。

風の吹くまちで、そのまちに暮らす人々を追った。

azbil

山武グループPR誌 azbil(アズビル)

2007
June **6**

azbilは、グループの気持ちをひとつにするための、シンボルマークです。
グループ理念である「人を中心としたオートメーション」で、人々の「安心、快適、達成感」を実現するとともに、地球環境に貢献します」という思いを込めました。

台風とともに暮らす

穏やかに吹く風は心地よくても、強風となれば話は別。

雨を呼び込み、屋根瓦を吹き飛ばす台風は、

科学技術が発達した現代でも

太刀打ちできないエネルギーを持っている。

そんな台風と、うまく共存してきたのが沖縄だ。

台風とともに暮らすために、沖縄の人々は

どんな工夫を凝らしてきたのか。



中村家12代目の
中村国広さん

「ある嵐の夜のことで。台風対策のために、強風に煽られながら必死に家までたどり着くと、中はひっそりと静まり返っていました。まるで突然台風の目に入り込んだかのようにした。」

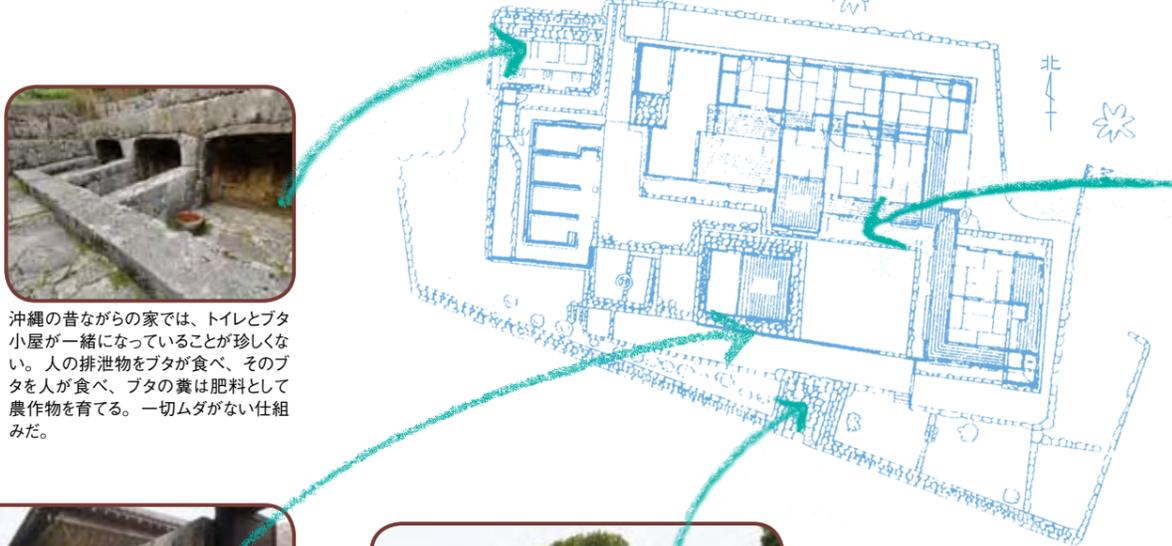
ここは、沖縄の伝統的住居建築を今に残す、国指定重要文化財・中村家住宅。冒頭のエピソードを語ってくれたのは、この家の管理者であり12代目の中村国広さんだ。

沖縄の台風は6月に始まり、8月をピークに11月頃まで発生する。本州に来る台風のように一晩で去っていくものではなく、ゆっくりと一カ所に停滞するのがやっかいなところ。風速30〜40mもの風が、一週間も吹き続ける。農作物の被害は大きく、人もなかなか外出できないほど。だから沖縄の人々は、知恵を絞って台風の被害を最小限に食いとどめる方法を模索してきた。

中村家を訪れてまず圧倒されるのは、巨大な石垣。人の背丈を優に超える石垣が、家の四方をぐるりと取り囲んでいる。さらに、石垣の上には、高さ10mにもなる防風林がぎっしりと葉を伸ばしている。家の正面に立ってみても、ヒンブンと呼ばれる目隠し塀のおかげで、中の様子を見ることができない。唯一見える母屋の屋根からは、魔除けの獅子・シー



沖縄ではほとんどの家屋が戦争により消失しているため、伝統的な沖縄式の建築を残す屋敷は数少ない。中村家住宅は約280年前に建てられ、沖縄の住居建築の特徴をすべて備えて、その歴史を今に伝えている。



沖縄の昔ながらの家では、トイレとブタ小屋が一緒になっていることが珍しくない。人の排泄物をブタが食べ、そのブタを人が食べ、ブタの糞は肥料として農作物を育てる。一切ムダがない仕組みだ。



門の内外を仕切り、外から直接母屋が見通せないように目隠しの意味を持つヒンブン。中国の「屏風門（ピンフォンメン）」が沖縄に伝わってきたと言われている。



防風林は、幸福と繁栄をもたらす木として知られる福木でできている。葉がぶ厚く、密生して生えるために風を通さない。また水分を多く含んでいるため、防火林としても役に立っている。さらに木の皮は、沖縄の伝統的な染め物「紅型（びんがた）」の染料に使われている。ちなみに中村家の福木は推定樹齢200年。



石垣の積み方は、「あいかた積み」と呼ばれる沖縄独自のもの。5角形や6角形など多面体の岩を積み、すき間に小石を詰めて組む。面が多いことで力が加わっても多方向に分散され、衝撃に強い。



南に面する軒先は、「あまはじ」といって屋根を長くしている。雨風や日差しを遮り、快適に過ごす工夫だ。



沖縄ではスコールのような激しい雨が降った後、カラッと晴れることが多い。そのため、瓦はある程度水が染み込むように素焼きのままにし、太陽の熱で水分が蒸発する時に屋根裏の熱を奪い、涼しくするようにしている。



シーサーは、瓦職人が余った瓦と漆喰を使って作る魔除け。最近では門の上に2匹載せている家も多いが、正式には母屋に1匹。ちなみに中村家のシーサーは現在2代目。たくさんの雨風をしのいだのであろう初代シーサーは、倉庫の奥でひっそりと眠っていた。

サーが大きな目を見開いてこちらを威嚇している。これでは、風も恐れをなしてしまおうというわけか。

中村家は斜面を切り開いて建てられているため、北側は土地が高い。防風林も屋根を超える高さで切り揃えられ、風は屋根の上を吹き抜けるしかない。風の被害を受けにくいように、設計段階から計算しつくされているのだ。

気温も湿度も高い沖縄で風が抜けなければさぞかし暑いだろうと思うが、不思議とそんなことはない。日差しの強い南側では軒を長くしたり、天井にすき間を作り通気性を確保するなど、随所に工夫が凝らされている。鉄筋コンクリートで固めて雨風を遮断し、エアコンで涼をとる現代の家にはない、昔ながらの知恵が生かされている。

沖縄の人にとって、台風は怖いものではないらしい。台風は毎年当たり前のようにやってきて、たくさんの風と雨で大地を洗う。その雨は大地を潤し、その風は作物につく害虫も吹き飛ばしてくれ。そして台風が過ぎ去ると、空には色鮮やかな夕焼けが広がる。すべてを浄化する台風は、沖縄の人々にとって、やっかいだがなくてはならないものなのかもしれない。

azbil Topics | 高感度、高速応答、ワイドレンジの気体流量センサ マイクロフローセンサ

マイクロフローセンサは、山武のMEMS (Micro Electro Mechanical Systems) 技術を用いて開発した、1辺が1.7mm、厚さ0.5mmの気体用熱式質量流量センサです。高感度、高速応答、ワイドレンジ、小型、低消費電力などの特長を備えています。最近ではCO₂排出量削減などを目的とした省エネの一環として、燃料、動力、熱交換の媒体などに使われているさまざまな流体の流量管理が重要になってきており、微量から大流量までの広い範囲でエネルギー効率に関係する質量流量計測を可能にしたこのマイクロフローセンサは、漏れ検出、使用量管理などに使われ、大きな省エネ効果に貢献しています。2004年には計測自動制御学会新製品開発賞を受賞しました。





越後平野には、6月になると風揚げに適した穏やかな風が吹く。地元の人はこの風を見極め観戦に行くため、盛り上がるシーンを逃さずに見られるのだそう。会期中には「下風吹いたっけ、凧見けれ」（北風が吹いたから、凧を見に行こう）という会話があちこちで聞かれる。



勝敗を左右する凧綱は麻でできており、約100日間かけて組の若者が締め上げてつくる。大役を任せられた若者は、緊張で手が震えるという。

現在は白根側の東軍6チーム、西白根側の西軍7チームの計13組で争う。まず東軍が24畳もの大きさの凧を揚げ、低空に保って相手を待つ。次に、約80m離れた対岸から西軍が凧を空高く揚げ、真っ逆さまに落として東軍の凧と綱を絡める。そして、お互いに相手の綱が切れるまで引つ張り合う。勝負は一回では終わらない。町内ごとに30枚ほどの凧をつくり、5日間の会期中、幾度となく戦いが繰り広げられる。

白根に住む人で、この合戦を知らない人は皆無と聞いていい。小学生から70代までが一緒になって綱を引き、勝敗に一喜一憂する。普段はおとなしい人でも、堤防に上がると性格が変わる。なかには、「俺が行かんと凧は揚がらん」と頑なに信じているおじいちゃんまでいる。白根の人にとってこの合戦は、年に一度、戦いの血がうづく日なのだ。

白根の人々は戦争にとられたとき、戦もない。凧の図柄を描くのも、綱を結うのも、みんな組の人たちが分担して担当する。骨組みの組み方や綱の結び方、凧の揚げ方など、すべては組の年長者から若者へと教えられ、技術が伝承されていく。だからこの町の人々は、世代を超えてお互いの顔をよく知っている。ここまで長く続いてきたのも、町の人々の熱い想いがあったからこそ。しかし彼らに、伝統文化を守っているという気負いはまったくない。とにかく凧が好きで、凧の話が始まれば止まらない。だから明治維新を経ても戦争があっても、脈々と受け継がれてきた。



凧は組ごとに図柄が異なり、一枚一枚手書きしている。合戦も佳境にさしかかると、絵を描くのが間に合わず、下絵だけが描かれた白い凧が揚がることも。



白根凧合戦協会の会長・佐藤弘さんも、凧合戦を見ながら育った生粋の白根っ子。会長という立場でも、いざ合戦のときには自分の町内の凧を応援してしまうという。また最近、凧のイベントに招かれ海外出張も頻繁に行く。米国ホワイトハウス脇の公園で揚げたこともあるそうだ。

凧の合戦

風の力を利用して楽しむ凧。揚げるだけなら日本各地で見られるが、凧で合戦をするとなるとどうだろう。江戸時代から続く白根凧合戦は、新潟市を流れる中ノ口川を境に、凧と凧が真剣勝負でぶつかり合うもの。白根の人々が凧に託す想いを取材した。



東京かざぐるま 最適ソリューションが支える風力発電

地球温暖化対策の一環として、自然のエネルギーを有効活用しようと2003年に事業を開始したのが東京臨海風力発電所です。東京湾の潮風を受けて回転する2基の風車は「東京風ぐるま」として親しまれ、新しい東京のランドマークともなっています。風車の高さは約70m、羽の直径は約52mあります。この2基の風車で、一般家庭約800世帯分の年間消費電力量に当たる約250万kWhの電力を作っています。風力発電による発電量などを遠隔地から監視管理するためのソリューションを提供しているのが山武商会です。これからもグループの総合力を背景に、お客さまのニーズに応える機器の調達や最適ソリューション提供に取り組んでいきます。

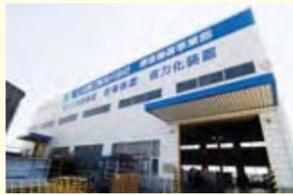


Products Review

燃焼安全制御機器 「AUR450C」

燃焼設備の安全確保に不可欠な燃焼安全制御機器。「AUR450C」は、より安全に、より使いやすく、そして安全性を維持するためのメンテナンス、トラブルシューティングをサポートするための表示や通信機能が充実したダイナミックセルフチェックバーナコントローラです。

近藤工業株式会社



設立：1962年
本社：愛知県豊田市高丘新町天王11番地
環境機器事業部：愛知県刈谷市一里山町金山5番地(刈谷工場)
東京営業所：東京都豊島区東池袋1-7-5
大阪営業所：大阪市西区阿波座1-5-2



近藤工業株式会社
専務取締役
青山 幸夫氏



環境機器事業部
執行役員 事業部長
神野 陸男氏



環境機器事業部 環境営業部
統轄営業所長兼東京営業所長
鶴巻 浩氏



環境機器事業部 環境技術部
電気課 チーフエンジニア
上野 正晴氏

自動車部品製造を目的に設立以後、高精度テクノロジーを礎に、事業分野を積極的に拡大しています。

2004年、山武はダイナミックセルフチェックバーナコントローラ「AUR450C」を開発しました。AUR450CはアドバンストUVセンサAUD300Cと組み合わせ、バーナへの自動点火、燃焼中の火炎監視を行います。万一バーナの火炎が消えた場合は燃焼装置を安全に停止させる機器です。「すぐに採用を決定しました。これまで以上に私たちの安全思想を満足

より安全に、より使いやすく

最適な装置を開発、製造、設置し、その後はメンテナンスをしていきます。こうした総合的な対応力が当社の強みです」(鶴巻統轄営業所長)
同社の技術力の高さは、1000台を超える納入実績、口コミによる新規ユーザーやリピーターの多さが証明しています。

「脱臭装置は正常に機能していることが当たり前。事故防止のための安全配慮に終わりはありません」(上野チーフエンジニア)
大気環境への関心は高くなるばかりで、溶剤に使われるトルエンなどの揮発性有機化合物への対策は、今後は中小の工場にも求められるようになると思います。「機能や大きさなど、あらゆるニーズに応えられる脱臭装置の開発に努め

させてくれる製品だったからです。シーケンスがLEDに表示されることで燃焼装置の状態が把握できることも大きな魅力です」(上野チーフエンジニア)
「AUR450C」は燃焼制御回路の故障チェック後に点火動作に進むスタートチェック機能や、万一燃焼制御回路が故障した場合は必ず安全側に作動するように設計されています。



AUD300C

ていきます。環境保全に寄与する製品だからこそ、安全にはこれからもこだわっていきます」(青山専務)
環境保全に欠かせない脱臭装置とそれを支える燃焼安全制御機器の役割は、これからますます大きくなります。



制御盤に組み込まれた「AUR450C」



Vol.1 近藤工業株式会社

多彩なニーズに対応した 各種脱臭システムの 安全な運用をサポート

大気環境保全に貢献する脱臭装置の安全運転の要として燃焼安全機器が活躍しています。

(写真提供：近藤工業株式会社)



脱臭装置の制御を行う制御盤

最も成長が期待される 環境機器事業部

総合建設会社として快適な生活環境の創造に取り組み近藤組を中核とした近藤グループ。その中の自動車部品などのものづくりを担う近藤工業株式会社が、脱臭装置などを手がけていた近藤運輸機工株式会社を合併し、2006年7月、近藤工業株式会社として新たなスタートを切りました。事業分野は自動車部品事業、パーキング事業、エクステリア事業、工作機械事業など幅広く、どの分野も業界ナンバーワンを目指しています。中でも、最も成長が期待されているのが工業用の脱臭装置を手がける環境機器事業部です。環境保全に関心が高まる中、大気汚染防止法が

強みはお客様まニーズに 総合力と安全思想

脱臭装置製造の歴史はすでに35年あまりになります。同社と山武との関係も、脱臭装置の歴史とともに歩んできました。

「当初から山武の燃焼安全制御機器を採用してきました。安全に対しては山武製品が最も信頼できたからです」(青山専務)

燃焼式脱臭装置は炉内が非常に高温になるため、安全確保の鍵を握る燃焼安全制御機器は脱臭装置の要です。

「当社製品はすべてカスタムメイドです。お客様まニーズに応え、しかも安心して使える装置を提案してきました」(神野事業部長)

「お客様のニーズ、プロセスを理解したうえで、排ガスの性状、強さ、流量などを検討してその工場にとって

気体流量計による 燃費測定法の確立

「質量法などがあります。いずれも精度の高い測定方法を確立できませんが、アイドリングや加速など、刻々と変化する状況における燃費（瞬間燃費）は計測できません。

「加速や減速など、運転状況ごとの燃費を測定するために水素ガス用の汎用流量計で実験してみました。要求通りの精度が実現できませんでしたが、高速応答の特徴により可能性を見出したのが山武の気体流量計でした」（黒田研究員）

「走行状態により流量の変化が激しいので、広いレンジ幅で計測できること、汎用品と比較して高い計測精度などを私たちは流量計に求めました」（矢野研究員）

2003年から開始された同センターと山武による水素ガス専用流量計の開発は、いくつもの課題を乗り越え、2006年に「MRA2000」という製品として実を結びました。最大の難関は、車種によっては水素ガスが安定的に流れず脈動すること。当初は気体流量計自体に脈動を捉える機能を付加しようとしてきましたが、最終的には実験装置に改良を加え、脈動を抑える方法を採用することで流量計本来の性能を引き出すことができたといえます。そして現在、この気体流量法は国際規格案として提案され、審議されています。

Vol.2 財団法人日本自動車研究所 FC・EV センター

燃料電池自動車の燃料消費率測定を確立に挑戦

燃料電池自動車の燃費測定方法の規格化、標準化に向けた取り組みを、高精度気体流量計測技術が支えています。



燃費計測は、実験車をローラーの上で走行させて行います（写真提供：財団法人日本自動車研究所）

燃料電池自動車の 開発、評価、普及を目指して

財団法人日本自動車研究所は、公益法人の試験研究機関として、環境と安全を2本柱とするさまざまな研究を行っています。そうした活動の中で、燃料電池自動車と電気自動車に関する環境面・安全面からの評価システムの開発を行っているのがFC・EVセンターです。

資源の有効活用や環境配慮などの観点から、燃料電池自動車や電気自動車など、石油以外のエネルギーを動力源とする自動車の開発に関心が高まっています。特に日本では、燃料電池自動車の開発が活発で、その技術は世界で最も進んでいるといわれています。同センターでは、企画・実証グループ、標準化グループ、性能研究グループ、安全研究グループの4グループが、次世代自動車と期待される燃料電池自動車の技術動向調査や技術研究開発、標準化や普及活動に取り組んでいます。

燃料電池自動車の 性能試験方法の検討

「各自動車メーカーなどで実用化のための開発が進む燃料電池自動車の評価方法の標準化に向けて、ISO規格の具体的な規格案を作成することが当センターの使命の一つです」



(写真提供：(財)日本自動車研究所)

（渡辺センター長）
たとえば、普通自動車の燃料消費率（以下燃費）は国土交通省により車種ごとに公表されています。日本の場合の燃費とは「燃料1リットルでクルマが走れる距離（km/l）」のこと。ある一定の走行パターンに基づいた燃費測定を行うことで、違う車種でも燃費比較が可能です。気体が燃料となる燃料電池自動車についても、燃費を精度良く計測する試験方法が求められてきました。そこで、簡便で精度の良い燃費試験方法の検討を始めました。

計測手法には、燃料である水素を入れた容器内の圧力変化から求める圧力法や、容器の質量変化から求め

「燃料電池自動車の走行状態に合わせて燃費を精度良くリアルタイムに測定することで、さらに、効率の良い燃料電池自動車開発に貢献できます」（矢野研究員）

圧力法や質量法は固定式の実験装置でしか燃費を計測できませんでしたが、この方法は、気体流量計そのものを車体に搭載しながら走行できるメリットがあるので、異常状態の監視などにも応用できるものといわれています。

「技術的に進んでいる日本が、国際規格案作成でも世界をリードする活動が行えるのは、当センターの誇りです」（渡辺センター長）
これからのクルマ社会を担う燃料電池自動車の進化を支える同センターの活動に世界が注目しています。



燃費計測用の実験装置



財団法人日本自動車研究所



設立：1969年
所在地：茨城県つくば市河間2530
職員数：375人（2006年4月1日現在）



財団法人日本自動車研究所
FC・EVセンター
センター長
渡辺 正五氏



研究員
黒田 英二氏



研究員
矢野 勝氏

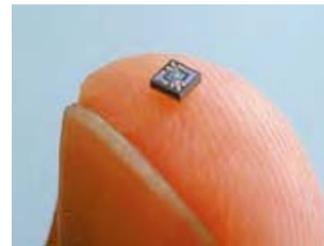
2003年、財団法人日本自動車協会、財団法人自動車走行電子技術協会と統合し、新たなスタートをきった財団法人日本自動車研究所は、未来を的確にとらえた先導的な研究の推進、低公害車の普及の促進を通して、21世紀のクルマ社会のより健全な進展に貢献しています。

山武の技術を駆使して開発したマイクロフローセンサ。高感度、高速応答、ワイドレンジの質量流量計測ができる特徴を生かし、高性能質量流量計として、ガス供給源から末端配管まで、あらゆる場面の流量管理に貢献している。さまざまなラインアップが用意されている気体流量計だが、カタログに載らない製品もある。その一つが「MRA2000」だ。これは100...1の計測範囲と高機能を両立した小型マストローメーター「CMSシリーズ」をベースに、燃料電池自動車の燃費測定専用流量計として開発したものだ。最大の特徴は2~2000ℓ/minのレンジ幅にある。燃料電池自動車の燃料である水素の流量はアイドリングや加速などの状態により激しく変化する。その流量変化の中、高い精度で測定できることが要求された。開発メンバーはその要求を、流路を多段式にすることでクリアした。小さな口径で2~20ℓ/min、次に大きい口径で20~200ℓ/min、最大口径で200~2000ℓ/minの流量を計測するのだ。つまり、マイクロフローセンサが3つ内蔵されている。

実は、口径を多段式にすることでレンジ幅を広くするアイデアは10年前からあり、試作段階まで進んでいた。こうした開発者の不断の努力が、「MRA2000」のようなカスタムメイド製品開発で一気に花開く。世界で数台しかない製品に込めたエンジニア魂。清田は「化学分野でも信頼される精度に高めたい」と新たな市場開拓を目指す。多段式アイデアをあためていたメカ設計担当の稲垣は「よりシンプルな流路構造で高精度を実現したい」という目標を掲げている。そして最後に百瀬は「これまでのノウハウを生かして、お客さまへ新たなソリューションを提供していきたい」と締めくくった。

MRA2000

(エムアールイー 2000)



写真左より瀨尾、清田、真行寺、稲垣、百瀬

瀨尾 雅己 清田 久夫 真行寺 信義 稲垣 広行 百瀬 修

アドバンスオートメーションカンパニー
マイクロフロー事業部
開発グループ

1988年入社、燃焼機器コントローラの開発、その後、マイクロフロー製品の開発に携わる。「お客さまのニーズに合った製品、喜んでもらえる製品を開発し、早く“azbil”を浸透させたいです」

アドバンスオートメーションカンパニー
マイクロフロー事業部
開発グループ

2002年入社、マスフローコントローラ専門メーカーにいた関係から山武への開発に携わる。現在はマスフローの流量標準を手がけている。「ガスの流量精度は不明確でつかみどころがないものです。そうした中で、より高精度な製品としてブランドイメージを上げたいです」

アドバンスオートメーションカンパニー
マイクロフロー事業部
開発グループ

1987年入社、給湯器コントローラおよび燃焼安全機器の開発、高精度酸素流量計の開発を経て、いまは家庭用燃料電池向け流量計の開発に取り組む。「自分で新しい成長の芽を作り、仲間を借りつつ、マイクロフロー製品開発に貢献していきたいと思っています」

アドバンスオートメーションカンパニー
マイクロフロー事業部
開発グループ

1981年入社、金型設計、ガスバルブの製品開発を経て、現在、マイクロフローセンサを用いた流量計の製品開発を担う。「マイクロフローセンサの可能性を追求することにより、お客さまに役立ていく製品開発を目指します」

アドバンスオートメーションカンパニー
マイクロフロー事業部
開発グループ

1986年入社、主にOEM向け燃焼機器コントローラの開発に携わり、1997年よりマイクロフローセンサ応用製品CMG、CMQ、MPC、CMQ-Vシリーズの開発を担当、現在に至る。「azbilの基本理念“人を中心とした”の発想で、今後もより良い製品作りに取り組んでいきたいと考えています」

夏に備えて知っておく 台風の名前の話



毎年夏になると猛威を振るう台風。米国などではハリケーンという名をよく耳にしますね。実はこれ、呼び名が国際的な取り決めによって決まっているから。台風とは、日付変更線より西、東経100度より東の太平洋・南シナ海で生まれた熱帯低気圧のうち、中心付近の最大風速が34ノット（毎秒17.2m）以上のもののこと。Typhoonと表記し、台湾のほうから来る嵐を意味する中国語からきているそうです。東経180度より東ではHurricane、東経100度より西ではCycloneと呼び、オーストラリア周辺のはWilly-Willyと呼ぶこともあるとか。ちなみに、北大西洋に発生するハリケーンの名前に「カトリナ」や「ジェーン」など女性の名前が多いのは、米国空軍や海軍の気象学者が自分のガールフレンドや妻の名前からとったことが始まりだそうです。大暴れするハリケーンに自分の名前が付けられた彼女たちは、さて嬉しいのやら悲しいのやら……。

戦後気象庁によって命名された台風

正式名称	気象庁命名	国際名
台風195415号	洞爺丸台風	MARIE
台風195822号	狩野川台風	IDA
台風195914号	宮古島台風	SARAH
台風195915号	伊勢湾台風	VERA
台風196118号	第2室戸台風	NANCY
台風196618号	第2宮古島台風	CORA
台風196816号	第3宮古島台風	DELLA
台風197709号	沖永良部台風	BABE

日本では西暦年と発生順を組み合わせる番号方式で命名

特に被害の多かったものについては上陸地名を参考に命名することも

世界の国々の多くは、あらかじめ名前をリスト化し、発生順に付けていくリスト方式を採用している

azbil

私たちは、
「人を中心としたオートメーション」で、
人々の「安心、快適、達成感」を
実現するとともに、
地球環境に貢献します。

編集後記

はじめまして。6月号より編集を担当させていただくことになりました。まだまだ未熟者ですが、PR誌「azbil」の編集を通して新しいことをどんどん吸収し、更に皆さまが楽しみにしていただけるPR誌を目指してがんばります。今年風が強い日が多く多いですね。あつという間に雲を運んで来て雨を降らせ、あつという間に雲を連れ去りキレイな月が輝くという自然のすごさを感じる今日この頃です。(akubi)

山武グループPR誌「azbil」を ご愛読いただき、ありがとうございます。

- 本誌に関するお問い合わせやご意見、ご希望、ご感想、取り上げてほしいテーマなど、皆さまからのお便りをお待ちしております。お名前、貴社名・部署名、ご住所、電話番号などをご記入の上、下記まで郵送、FAX、電子メールなどでお寄せください。
- ご住所などの変更に関するご連絡は、宛名ラベルに表示されております8桁の登録番号も併せてお知らせください。

■お問い合わせ

〒100-6419 東京都千代田区丸の内2-7-3 東京ビル
株式会社 山武 広報グループ azbil 編集係
TEL: (03) 6810-1006 FAX: (03) 5220-7274
E-mail: azbil-pr@jp.yamatake.com

- 発行日：2007年6月1日
- 発行：株式会社 山武 広報グループ
- 発行責任者：須原 一郎
- 制作：産業編集センター

表紙の言葉 この絵は、社団法人発明協会が子どもの自由奔放な発想を広く集めた「第28回未来の科学的夢絵画展」の作品の中から、同協会のご協力を得て掲載し、表紙に特徴的部分を拡大しています。



【みんなにここにへんしん おふる】

- 鎌田 美里さん
- 秋田県由利本荘市立石沢小学校1年生
このお風呂は、入る人に合わせて形が変わります。赤ちゃんのベビーバスになったり、お母さん用に深くなったり、楽しいお風呂タイムにみんなにっこりです。



azbilの拠点がある街を紹介します。

“ 新潟 ”



食の豊かな日本海の拠点

Niigata

新潟県は面積が広く、平成の大合併前には100を超える市町村が存在していた。上越・中越・下越に佐渡を合わせた4つの地域からなり、全国一の長さを誇る信濃川と阿賀野川の流域には、越後平野が広がる。また、山や峠が立ち並び、ダイナミックな自然が広がっている。長い海岸線を持ち、古くから対岸の朝鮮半島、中国東北部やロシア沿海地域との国際交流を続けてきた。江戸時代には日本海の実業拠点としてにぎわい、港を中心に基盤が整備された。1858年には、日米修好通商条約によって横浜・長崎・函館・神戸と並んで開港を約束し、以後、本州日本海側で最大規模の都市となっていた。

新潟の気候は、北陸地方の特色と同じく四季がはっきりとし、冬の山間部には大量の雪が積もる。冬は日照時間が短くて降雪が多く、夏は日照時間が長く雨量が少ない。清らかな雪解け水が豊富な春と、稲が十分に育



つ高温な夏があることで、新潟はおいしいお米の産地となった。また、豊かな水量の大河が生んだ肥沃な大地のおかげで、国内でも有数の食料供給基地としての役割を果たしている。お酒の産地としても有名で、「久保田」や「八海山」など、通をうならせる名酒も数多い。辛抱強くけなげといわれる県民性も、数々の名産づくりに役買っているのかもしれない。

新潟市は2005年の大規模な市町村合併によって、面積も人口も大幅に増加。2007年4月からは日本海側としては初の政令指定都市となった。本州日本海を望む拠点として、今後ますます脚光を浴びそうだ。

azbil azbilは山武グループのシンボルマークです

- 山武 山武商会 山武コントロールプロダクト
- 山武エキスパートサービス 山武フレンドリー
- 山武ケアネット 安全センター イー・エス・ディ
- 熊本安全センター セキュリティフライデー
- 原エンジニアリング 金門製作所 太信
- ロイヤルコントロールズ テムテック研究所

販売店